

二〇二四年度

二月一日午前入試

# 国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、1-1 から 1-11 まであります。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

視覚支援学校に通う中学一年生の宇佐美佑は、四月から寄宿舎での新しい生活がはじまり、クラスメイトもふえたが、気持ちが晴れないでいた。小学部からの友人である双葉が、歩行中の事故をきっかけに三月から学校に来なくなってしまうたからだ。何度連絡をしても双葉からの音信はなく、双葉と会えなくなってしまう佑は、授業や白杖の訓練に身が入らない状態が続いていた。そんな佑だったが、白杖を使って双葉に会いに行くという目標のために、苦手だった白杖の訓練に挑戦しはじめる。

その日の歩行の授業は、タッチ方式で歩くことからはじまった。

背筋をのばして、塚田さんから教えてもらったフォームを心がける。校庭の一面を途中まで歩いてひきかえしてくると、「だいぶスムーズに白杖をふれるようになったんじゃないかな。」と、ほめてもらった。

一日でも早く双葉のところへ行けるようになった佑は、放課後や週末にコツコツと練習してきたのだ。はじめのころは、しびれたり筋肉痛になったりしていた手首も、コツをつかんだ最近はびくともしない。

そういったことを塚田さんに話すと、「努力のたまものだな。」と認めてもらった。

佑はタッチ方式で白杖をふりながら、校庭の東側にある通路を行ったり来たりした。塚田さんからは、「右」と「左」は視点が反転すると逆になってしまうけれど、東西南北がひっくりかえることはないから、なるべく東西南北で位置を把握するようにとアドバイスされている。

寄宿舎と校舎を結んでいるこの道は、佑たちの通路でもある。佑は、通路の南側にある木々と、北側にある理療棟を思い浮かべながら、一定のスピードで歩きつづけた。

佑にとつて、無限に広がっているかを感じられる世界を、東西南北の四つに区切って捉えることは、簡単ではない。左右や中心を意識するのだから大変なのに、東西南北を意識しろだなんて、塚田さんは無茶なことをいうんだな、と最初はうらめしく思ったほどだ。

たとえば、とてつもなく広いプールの真真中に、仰向けでうかんんでいる自分を想像してみてもほしい。そのうち身体と水が一体化して、自分と自分じゃないものの境界線がわからなくなるんじゃないだろうか。どこを見ても目印となるものがなければ、右へ進んでいるのか左へ流されているのかだって、わからないはず。

② そういう空間に、「北」とか「西」とか「南」とか「東」とか名前をつけて、日々佑たちは歩いているのだ。「残りの時間は体育館まで行ってみよう。行き方は大丈夫だよな?」  
何往復かしたところで、背中に塚田さんの声がとんできた。  
太陽の日差しが向こうから降りそそいでくるということは……。

佑が「あつちに行くんですよね?」と指をさすと、すぐさまいいかえされてしまった。

③ 「できるだけ言語化しよう。」  
言語化。

東西南北を意識するのと同じくらい佑が苦戦しているのが、この「言語化」だ。目が見えないからこそ、自分の考えや状況を、相手にも伝わるように、言葉にして伝えることが重要になる。それができないと、相手と世界を共有できなくなってしまう。

佑はまず頭の中に、校舎と校庭を思い浮かべると、切りだした。

「まず、理療棟と北校舎を結んでいる渡り廊下を目指します。」

「うん。小さな達成目標をいくつか設定するのはいいことだよ。次は？」

「渡り廊下を横断しながら、北校舎の壁側を歩くようにして、壁伝いに角を左へ。」

塚田さんからは、点字ブロックがない場所では、建物の塀や壁、路肩の縁石など、そこから動かないものを活用すると、車道にはみだすことなく歩くことができると、教えてもらった。

「北校舎を校門の手前まで歩いたあたりで、ここでも建物の角を利用して左に曲がります。そのまま西校舎の壁伝いにまっすぐ南へ進めば、体育館の入り口です。」

「うん！ いいんじゃないかな。今、自分がどこにいて、これからどこを通過して、どこにむかうのか、きちんとイメージできていたね。」

心の準備ができ次第スタートしよう、と塚田さんにいわれて、佑は深呼吸した。

ここはよく知っている場所で、人も車もめつたに來ないこともわかっている。すぐそばには歩行訓練士の塚田さんがいる。それでも、佑の心臓はいつにないくらいドキドキした。

すーっと息を吸ってから、佑は白杖をかまえた。まずは、白杖の先端についている「石突き」と呼ばれる部分で、足もとの状態をさぐる。

どうやら右側に障害物があるようだ。高さは二十センチくらいだろうか？ この先もしばらくつづいてみたいだ。……いったい、何だろう？

すぐには答えが出そうになかったので、佑はしゃがんで、さわってみた。

なるほど。花壇のブロックだ。

白杖を使うことで、二歩くらい先までの情報を得ることができる。具体的にいうと、障害物のあるなしと、地面がどんなふうになっているかだ。

佑が認識できるのは、半径でいったらせいぜい一メートルちよつとの世界だ。とはいえ、これまで、未知だった世界の一端が想像できるようになった。少なくとも、二、三步先にも地面はつづいていて、ほぼ平らだということがわかるだけでも、ずいぶんと安心して歩くことができる。

佑はタッチ&スライド方式で、花壇のブロックを利用して歩きながら歩くことに決めた。

二歩ばかり先にある世界を想像しながら歩きだした直後、心の中で「あっ！」と声をあげていた。

もしかすると、松木先生が「両手を使えば、世界は広がる」といつていたのは、こういうことなのかもしれないぞ。

右手では見えない部分を左手でカバーすることで、佑の世界は二倍に広がる。ちょうど白杖で地面をさぐることで、一メートルばかり先の世界を知ることができるように。

佑は校舎の一部を利用しながら、一定のテンポで白杖をふることを心がけた。角を曲がるときは、出会い頭に向こうから歩いてきた人とぶつからないように、白杖を「タン」と一回地面について、こちらの存在を相手に知らせる。「白杖を凶器にしないためのマナー」だと、塚田さんから教わった。

しばらく歩いたあたりで、球技をやっているらしき生徒たちの声と、ボールの音がきこえてきた。

体育館に着いたようだ。佑はほっとして、肩の力をぬいた。

「はじめてとは思えないくらい安定していたよ！ 白杖はもちたくないなんていつていたけど、筋はいいんじゃないかな。」

塚田さんにほめられて、じわりじわりと達成感がこみあげてくる。

この調子でいけば、夏休み中に、双葉のところに行けるかもしれないぞ！

そう、このときの佑はつきり、このまま上達していくとばかり思いこんでいたのだった。

白杖はくじょうを使いこなせるようになるまでには、まだまだ時間がかかると思い知らされたのは、七月。もうすぐ夏休みがはじまるというところだった。

「ストップ、ストップ！」

その日、タッチ方式で歩いていた佑たすくは、けわしい塚田つかたさんの声におどろいて、あわてて足を止めた。

「さわるよ。」

塚田さんは佑の左腕ひだりうでをつかむと、すぐそばにあるものにさわらせてくれた。

ひんやりとして、丸みをおびた、硬いもの……。

佑が手をのばした先にあったのは、電信柱だった。

こんなに間近にせまっていたなんて、ちっとも気づいていなかった。あのまま歩いていたら、正面からぶつかっていたかもしれない。

五月に白杖の持ち方からスタートした歩行の授業は、ここ最近では学校を出て、周辺のエリアを歩くまでになつていった。

「あまり車が通らないとはいえ、ここは一般道いっぴんどうだぞ。集中して歩かないと！」

めずらしくきつく注意されて、佑はすなおに反省した。もし塚田さんがいなかったらと考えると、背筋せじんがぞくぞくと粟立あわだつ。

タッチ方式の欠点は、白杖が片側の地面に「タン」とついてから、反対側へ「タン」とつくまでのあいだ、杖の先端つえが空中にあるという点だ。気をつけないと、今みたいに、電信柱のような大きなものでさえ、「タン」と「タン」のあいだに見落としてしまう。

実際、街を歩いているとき、電信柱や看板かんばんにぶつかってケガをする視覚障害者は少なくないという。では、スライド方式で歩けばよいかというと、つねに地面に接しているスライド方式は振動しんどう＝情報が多すぎて、手も神経もくたびれてしまうという難点がある。使⑦いわけがむずかしいところだ。

塚田さんは、今、佑が歩いているような電信柱が多い住宅街では、やや車道寄りを歩くのがポイントだと、アドバイスしてくれた。

「ただし、白線からはみださないように、こんな感じで振り方を工夫するんだ。」

塚田さんは後ろから佑の手をとると、タッチ方式で白杖をふってみせた。

左右均等ではなく、車道側は小さく、路肩側ろかたはやや大きくふるのがポイントのようだ。

「そうしたら校門までもどって、最初からやりなおそう。」

塚田さんがさらつとといったものだから、思わず佑は「えっ！ 最初からやるんですか？」と、非難めいた声を出してしまった。

一学期最後の授業である今日は、これまでのおさらいだ。学校周辺に広がっている住宅街を歩いて、いつものコンビニまで行く計画になっている。ないしょでお菓子かしを買ってもいいというから、ズボンのポケットに三百円入れてきた。

授業がはじまって、どれくらいすぎただろう？

さわるタイプの腕時計うでどけいでたしかめようとしたけれど、こんなときにかぎって着けわすれてきたようだ。

「時間がもつたないから、校門まではガイドでもどろう。」※

塚田さんはそういうのが早いから、佑に腕を差しだした。

佑は、いったんは塚田さんの肘ひじをつかんだものの、じわじわと不満がこみあげてきた。

最初からやりなおしていたら、時間内にコンビニまで行けない気がする。お菓子を買って、今夜、栗田や光くんと食べるのを楽しみにしていたのに……。

気づけば、佑はグチをこぼしていた。

「せっかくここまで来たのに。」

⑨「失敗した分、練習できるチャンスがふえたと思えばいいじゃないか。」

あくまで前向きなことをいう塚田さんに、佑はイラッとした。

学校周辺の道はせまくて、ところどころ蛇行している。車も自転車もほとんど通らないとはいえ、けつして歩きやすいというわけでもなかった。理由は、点字ブロックや、目印となる「ランドマーク」が少ないからだ。

⑩ランドマークとは、頭の中に道筋を組みたてるときに活用する、建物や、もののことだ。たとえば、通りすぎると開閉するお店の自動ドアや、かすかに電子音を発している自動販売機、郵便ポストなど。生花店や、飲食店の換気口など、においを感じられるスポットも利用しやすい。そういったものが少ない住宅街は、油断するとすぐに、自分が今どこにいるかわからなくなってしまう。

⑪いったんイライラしはじめると、勢いよく注いだコーラがコップからこぼれるように、今まで胸にしまいこんでいたグチや不満が一気にあふれだした。

「前から思ってたんですけど。」と切りだした佑の声は、すっかり不機嫌だった。塚田さんにやつあたりしてはいけないと頭ではわかっているのに、感情を抑えることができない。

「こんなふうには、お店も自動販売機もない場所を歩くときは、どうすればいいんですか。」

「そういう場所こそ、事前にきちんと道筋を組みたてておくことが重要だろうね。あとは、冷静に白杖をふるること。それから、周囲の音をたしかめながら歩くこと。」

またそれかよ。

佑はむつつりと、いいかえした。

「簡単にいわないでください。」

塚田さんは耳にタコができるくらい、今、自分がどこにいて、これからどこを通過して、どこにむかうのか、かならず頭の中に道筋を組みたててから歩きだすようにという。

けれど、実際の道には車や自転車が走っているし、人も歩いてくる。車や自転車や歩行者が立てるちよつとしたもの音や、空気の流れに気をとられて、組みたてておいた道筋があやふやになってしまふことは、しよつちゅうだ。音をたよりにしろというけれど、自動販売機からもれてくる音は新型になるにつれて小さくなつていくし、営業中なら活用しやすい個人商店や郵便局は、つねに開いているわけではない。以前は、前を通りすぎれば反応した自動ドアは、最近では、手動のボタンを押さなければ無反応だ。天気や周囲の環境、技術の進歩などで、音は簡単に消えてしまう。

⑫塚田さんは、正しいかどうかの保証さえない場所を歩くことが、どれほど大変で、どれほどくたびれることか、わかっているのだろうか？ もし、組みたてた道筋がまちがっていたら？ そのときは、どうすればいいんだよ？

佑たちは、ひとつまちがえたら大ケガではすまないかもしれない場所を、白杖と音をたよりに、日々歩いているともいえた。

きつと、塚田さんは想像したこともないだろうな。だって、塚田さんは目が見えるんだもの。晴眼者は歩きながら音楽をきけるし、寒ければ手袋を着けられる。傘やカッパにあたる雨音に神経をとがらせること

だって、きつと、ない。

そんなふうを考えるや、佑たすくの心はますます  していった。

どうして、ほくが。

どうして、ほくたちだけが。

目が見えていれば……。

ほんの少しでも、目が見えていたならば！

そこで、こらえていたものがプツンと切れた。

「白杖はくじょうで街を歩くなんて、やっぱり無理なんだ。きつと、一生かかったって、できるようにならない。」

直後、<sup>⑬</sup>自分の口から出たその発言に、佑は傷ついた。

じわじわと悲しくなってくる。双葉ふたばに会いに行くために白杖歩行をがんばると決めたのは、自分自身のは

ずなのに……。

おい、双葉。こんなふうに感情が暴走したときは、どうしたらいいんだよ？

いくらたずねたところで、返事はない。あいかわらず、LINEも電話もつながらない。

——もう、大丈夫だいじょうぶ。

ちつとも大丈夫じゃないくせに。

無性むしょうにイラついた。

双葉がむかつく。

双葉にたよりにしてもらえない自分をもっともつとむかつく。

「できないなんて決めつけたらダメだよ。」

佑は、イライラのすべてを塚田つかださんにつつけた。

「塚田つかださんは晴眼者せいがんしゃだから、そんなことがいえるんだ！」

直後、いってしまった、と思った。

気持ちちがモヤモヤ、イライラしていたのに、言葉にしたからといってスッキリするわけではなかった。む

しろ、その逆だった。

やけっぱちになった佑は、にぎっていた白杖をほうりなげた。

「おいっ！ 歩行者にあたつたらどうするつもりだ？ たまたま通りかかった車にはじかれて、自分にはね

かえってくる可能性だっであつたんだぞ。だいいち、大切なものを粗末そまつにあつたらダメじゃないか！」

直後、<sup>⑭</sup>空気が動いた。

塚田さんはあつというまに白杖をひろうと、佑の手ににぎらせた。

いいよのない気持ちで、胸がつまる。

くやしい。悲しい。腹が立つ。

「いいよな、目が見えて！」

結果、練習は続行不可能と判断されて、その日の授業は終了となった。

昇降口しょうこうぐちの前でわかれるとき、塚田さんはおだやかな口調でこういった。

「宇佐美うさみくんを不愉快ふゆかいにさせてしまったことをあやまるよ。ただ、僕は、自分がまちがったことをいっただと

は思っていないんだ。これで夏休みに入るけど、気持ちを切りかえて、また二学期からがんばろう。」

「……………」

手をにぎられたけれど、佑は何もいいかえすことができなかった。

一年生になったら友だち百人できるかな、なんて歌があるけれど、ほんとうに百人も友だちをつくれる人なんて、いるのかな？ YouTubeのチャンネル登録数やTwitterのフォロワーがたくさんいる人の話はきいたことがあるけれど、どれくらい親しいんだろう？ それってほんとうに、ほんとうの友だち？

⑮ 友だちや知り合いは、木と葉っぱの関係に似ている気がする。自分という幹から枝がいくつものびていて、そこに家族や友だちといった葉っぱがしげっている。

葉っぱが多いほど、風が吹いたときのざわめきが大きくなるように、友だちの数だけ、悩みやジレンマも多くなるようだ。

佑は、中学生になって友だちが六倍にふえた。塚田さんは友だちではないけれど、こんなふうに気持ちぐゆさぶられるくらいの関係性ではあったらしい。これまで、双葉やクラスメイトのことだけでしめられていた学校生活の思わぬところで、佑は波風を立ててしまったようだ。

そんな佑にいわせれば、ほんとうに友だちが百人もいたら、死ぬほど大変だ。いつも、だれかとケンカしたり、仲直りしたり、どうふるまったらいいかわからなくなったりして、悩む羽目になる。

佑は、まだ授業が終わっていないせいで、ひっそりとしずまりかえっている昇降口に足を踏み入れた。外は汗をかきほと蒸し暑かったのに、ここの空気はひんやりしている。

「……………」

佑は下駄箱のうさぎのシールにさわりながら、あらためて、どうして、ここに、双葉がいなのだろうと思つた。

話をきいてほしかった。そして、これまでのように灯台となって、佑の行く先を、足もとを照らしてほしかった。

(榎崎茜『手で見ると世界は』より)

※(注)

白杖

視覚障害者が歩くときに使う専用の白い杖。

タッチ方式

白杖を左右の地面に交互にタッチする方式。

塚田さん

歩行指導を担当する、歩行訓練士。

タッチ&スライド方式

白杖の先端を地面につけたまま、半円を描くように動かすスライド方式と、タッチ方式の二つをミックスした方式。

松木先生

佑のクラスを担当している先生。

ガイド

視覚障害者に付き添って、歩行の介助や誘導をすること。

蛇行

蛇がはうように、くねくねと左右に曲がっていくこと。

晴眼者

視覚障害者に対して、視覚に障害のない人を指す表現。

問一——線①「努力」とありますが、<sup>たすく</sup>佑が<sup>はくじょう</sup>白杖の訓練でどのように取り組んできたことに対して「努力」と言っているのですか。解答さんの「こと。」につながるように、文中から二十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問二——線②「そういう空間に、『北』とか『西』とか『南』とか『東』とか名前をつけて、日々佑たちは歩いているのだ。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「そういう空間」とありますが、佑にとってこの「空間」はどのようなものですか。それが別の言葉で表現されている部分を文中から十八字でぬき出して答えなさい。

2 「北』とか『西』とか『南』とか『東』とか名前をつけて」位置を把握する必要があると塚田さんがアドバイスするのはなぜですか。文中から五十字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問三——線③「できるだけ言語化しよう。」とありますが、「言語化」するとは、具体的にどうすることですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 目が見えなくても状況じょうきょうを自分で把握できるよう、校舎や校庭などの情景を具体的に頭の中に思い浮かべ、それを正確に言葉で表現すること。

イ 目が見えないということを意識しなくても済むよう、自分の考えや状況を相手に伝えるときにはお互いに相手がわかりやすい言葉を使うこと。

ウ 目が見えなくても相手と世界を共有できるよう、自分の考えや状況を伝えるのに自分中心の表現ではなく、人が聞いてもわかりやすい言葉で表現すること。

エ 目が見えるか見えないかは関係なく、どんな相手とも世界を共有できるよう、自分の考えを伝えるときには自分の頭で考え、自分の言葉を使うこと。

問四——線④「佑は白杖をかまえた。」とありますが、白杖を使うことで足もとのどのような情報を得ようとしているのですか。文中から二つをぬき出し、それぞれ答えなさい。

問五——線⑤「『両手を使えば、世界は広がる』といていたのは、こういうことなのかもしれないぞ。」とありますが、佑はどうすることが「両手を使う」と同じだと気づいたのですか。解答さんの「こと。」につながるように文中の言葉を使って五字以内で答えなさい。



問十一——線⑪「いったんイライラしはじめると、勢いよく注いだコーラがコップからこぼれるように、今まで胸にしまいこんでいたグチや不満が一気にあふれだした。」とありますが、「今まで胸にしまいこんでいたグチや不満」の内容としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア コンビニでお菓子を買う計画を立てていたのに、時間内にコンビニまで行けないかもしれないこと。

イ 通りにランドマークが少なく、自分が今どこにいるかわからなくなってしまっているのではないかとこのこと。

ウ 塚田さんが佑のグチを聞き入れずに、校門までもどって最初からやりなおすように言ってきたこと。

エ 塚田さんが周囲の迷惑にならないかということばかりを気にして、佑に繰り返し注意してきたこと。

問十二——線⑫「正しいかどうかの保証さえない場所」とありますが、「正しいかどうかの保証さえない」のはなぜですか。次のア～オの中から適当なものをすべて選び、その記号を答えなさい。

ア あらかじめ道筋を組みたてておいたとしても、車や自転車、歩行者が立てるもの音や空気の流れに気をとられて、組みたてておいた道筋があやふやになってしまうことがあるから。

イ 頭の中に道筋を組みたてたとしても、ランドマークを正確に覚えるのは難しく、組みたてた道筋そのものがまちがっていることがほとんどだから。

ウ ランドマークをたよりに道筋を組みたてたとしても、天気や周囲の環境、技術の進歩などで、音が簡単に消えてしまい、当てにならないことも多いから。

エ 音をたよりにして道筋を組みたてたとしても、実際の道では車や自転車、歩行者の立てるもの音に邪魔されてすべての音が消えてしまうから。

オ 時間をかけて念入りに道筋を組みたてたとしても、数日で環境は変化してしまうため、事前に準備すること自体が無駄になるから。

問十三 文中の□にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア クサクサ      イ ドキドキ      ウ フワフワ      エ メソメン

問十四 —— 線⑬ 「自分の口から出たその発言に、佑は傷ついた。」とありますが、「佑」が「傷ついた」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 白杖で街を歩くなんて無理だと自分でもわかっているながら、それでも自分なりに頑張ってきた気持ちさがプツンときれてしまったように感じたから。

イ これまで晴眼者である塚田さんと自分の違いを意識したことなどなかったが、その違いを思い知らされ、引け目を感じてしまったから。

ウ 白杖歩行をがんばると決めたのに、それを自分の言葉で否定したことにより、自分自身を信じる気持ちさが打ち砕かれたように感じたから。

エ 双葉に会いに行くために白杖歩行をがんばろうと自分自身で決めたのに、周囲からの反対に打ちのめされ、自分の無力さを感じたから。

問十五 —— 線⑭ 「空気が動いた。」とありますが、この描写はどのようなことを表現したのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 塚田さんの我慢が限界をこえ、佑に対する態度が大きく変化したこと。

イ 佑の心を抑えていたものがはじけ、くやしさを、悲しさを、怒りがうまれたこと。

ウ 目の見えない佑が、塚田さんの動きを空気の流れて感じとったこと。

エ 塚田さんと佑の揺るぎない信頼関係にヒビが入ってしまったこと。

問十六 —— 線⑮ 「友だちや知り合いは、木と葉っぱの関係に似ている気がする。」とありますが、「友だちや知り合い」が「木と葉っぱの関係に似ている」とはどういうことですか。解答らんの「こと。」につながるように、文中から五十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問十七 —— 線⑯ 「灯台となって、佑の行く先を、足もとを照らしてほしかった。」とありますが、この時の「佑」の気持ちを説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 塚田さんやクラスメイトと上手くつきあえない自分の暗い性格に嫌気がさしており、自分とは対照的に明るさを失わない双葉のようになりたいと願う気持ち。

イ 塚田さんとの関係が壊れてどのように修復すれば良いのかわからず途方に暮れているので、双葉に判断を全てゆだねてしまいたいと願う気持ち。

ウ 優しい塚田さんに対して一方的に心無い言葉をぶつけて傷つけてしまった自分を責めており、双葉に叱咤激励してもらいたいと願う気持ち。

エ 塚田さんにやつあたりをしてしまった自分が嫌で、これからどうしたらよいかもわからず、双葉に自分を導く心の支えとなってほしいと願う気持ち。

## 二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 黒潮はダンリユウだ。
- ② 集団のシキをとる。
- ③ シユウシヨク活動を行う。
- ④ フンキしてやり直す。
- ⑤ 赤くジユクした果実。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 人の命は尊いものだ。
- ② 冬至は昼が最も短くなる。
- ③ 行司が軍配を上げる。
- ④ 新しい方法を試みる。

問三 次の①～④の  にあてはまる体の部分を表す漢字を後の語群からそれぞれ一つずつ選び、慣用句を完成させなさい。

- ①  がない
- ②  が立たない
- ③  であしらう
- ④  をかかえる

### 【語群】

目 鼻 耳 歯 胸 口 頭

問四 次の①～④の——線部の言葉をそれぞれ言い切ったかたち（終止形）に直しなさい。

- ① それほど高くない山。
- ② 静かに歩きましょう。
- ③ 駅に向かつて走る。
- ④ とんぼが飛んでいる。